

平成三十一年度 一般入学試験問題

国語

◎ 指示があるまで開かないこと

北海道社会事業協会 帯広看護専門学校

問題一 次の文章を読んで、設問に答えよ。

DNAの大量複製法を発見してノーベル賞を獲得したキャリー・マリスは、恋人を載せて山の中をドライブしているあいだに、突然その着想を思いついた。歴史的な発明・発見は、うまくいかず悩ましい努力を再三重ねたのちに、散歩しているときやトイレに入っているとき、あるいは夢を見ているときに、とつぜん「あちらから」アイデアが到来するようだ(「セレンディピティ」と呼ばれる)。

★ポランニーによれば、創造性も暗黙知の代表的な①所産である。悩ましい努力を通して近位項となる関連知識が整い、発明・発見の成果を希求することで遠位項が焦点化される。するとやがて、思わぬ形で結果が出てくるのである。まさに「Aを尽くしてBを待つ」という心境に効果があるのだ。

直木賞作家の石田衣良は、テレビ番組に出演して、「ずっと小説を書いているので、お話を作る②さんにくが強くなっているのです」と言う。

(中略)

創造的過程を意のままにコントロールする石田の③ぎのうには、暗黙知の特徴がよく現れている。さんざん考える時点では全体は現れない。しかしそれが煮つまって近位項となり、全体のストーリーに向かった無意識の働きがあるところで、意識が目指す作品としての遠位項が現れるのである。

創造の過程に限らず、もう少し日常的な問題解決も同様である。熟練した専門家は、問題を把握して解が欲しいと思うと、なぜか自然に解答が浮かぶのだ。知識システムの開発のために専門家にインタビューしてもうまくいかない。そうした専門家は、問題解決が無意識になされるようになっており、問題解決過程を説明できないことが多いのである。

このように、無意識のうちに働く暗黙知が、さまざまな場面で私たちの生活を支えていることがわかる。考えてみれば、朝眠い目をこすりながら身じたくをするときは、ほとんど無意識である。住み慣れた家であれば、一日中でさえも無意識に過ごせると言っても過言ではない。今ほんとうに無意識だったかな、などと考えてしまえば意識が現れるが、ごく自然に過ごせば無意識なのである。

無意識だからと言って軽く考えてはいけない。無意識のうちにも、かなり高度な心の働きを実現しているのだ。「直感を信じよ」という④しゅちようがあるが、それなりのトレーニングを積んでいけば、無意識から湧きでる直感、それなりに的をCものであるにちがいない。

先日、私の家では、洗面所の壁かけを数年ぶりに新しいものに掛け替えた。その翌朝、洗面所で歯磨きをしていた私は、視界の⑤隅に「怪しいもの」を感じ、ぎょつとしてその方向に目をやった。そこには前日に自ら掛けた、新しい壁かけがあった。無意識の働きを再認識する経験であった。

私たちは、ふだん生活する環境の見えを、無意識のうちに記憶にとどめて、つねに確認している。ふだんと異なる状態になれば、これは敵がひそんでいるなどの特別な事態を意味する。そんなときは、意識を目覚めさせるのだ。逆に言えば、安心できる日常的な状態では、もろもろのことは無意識に処理されて意識にはのぼらないようになっているわけだ。

いわゆる自閉症の患者は、この無意識にとどめる抑制処理がうまく働かない傾向がある。つまり、必要のないものを自然に無視するのが得意なようである。たとえば、自閉症の患者は、通常の人々ではなんでもないような、身体の接触や⑥れっしやの騒音が耐えられない。触覚や聴覚の刺激が強烈に意識にのぼるからである。また、環境の変化をいやがり、画一的な行動をとりたがる。いつものところに物体を置かないといけないなどと、ひどくこだわるのである。周囲に変化があることが危険の信号として、強く意識化されるにちがいない。自閉症の問題の⑦一端は「不必要な刺激を無視できない」ことにある。

心の自覚する部分は意識であり、私たちは意識的な人間として生きていたいと思ひこみがちだ。

D

、実際の

ところ心を支えているのは意識ではなく、おもに無意識である。私たちは、自らの無意識や、そこに働く暗黙知の価値をもっと重視すべきなのだ。無意識には、生活の知恵を産み出す貴重な仕組みが備わっているのだから。

(石川幹人『人間とはどういう生物か』 一部改変)

(註)★ポランニー マイケル・ポランニー。ハンガリーの哲学者。「tacit knowing(創造に関わる知)」を提唱した人物。

★暗黙知 認知の過程、あるいは言葉に表せる知覚に対して、言葉に表せない、説明できない身体の作動を指す。

★近位項 近いところにある項目、の意。対義語は遠位項。

設問一

□

内①～⑦の平仮名(ひらがな)は漢字に、漢字は平仮名(ひらがな)に書き換えなさい。

設問二

A

B

に適切な二字熟語を当てはめて、ことわざを完成させなさい。

設問三

C

には、どんな語句が入るか。次の中から最も適当と思われる語を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見た イ 得た ウ 経た エ 射た オ 居た

設問四

D

には、どんな接続詞(つなぎことば)が入るか。次の中から最も適当と思われる語を一つ選び、

記号で答えなさい。

ア ところが イ なお ウ さらに エ また オ そして

設問五

右に傍線部のある語句(a)「煮つまって」の意味として最も適当と思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何度やり直しても、また同じ問題にぶつかってしまふこと。
イ 間違いに気付いても、やり直せない状態に陥ること。
ウ 十分に考え尽くして、問題解決に近づいた状態になること。
エ いくら考えても、解決の糸口が見つかからない状態であること。
オ 条件が整い、あらゆる可能性を試せるようになること。

設問六

右に傍線部のある語句(b)「熟練した専門家は、問題を把握して解が欲しいと思うと、なぜか自然に解答が浮かぶ」ことについて説明した次の文の空欄ア～ウに入る語句として最も適当なものを、本文中から書き抜きなさい。ただし、ア、イは三字、ウは六字とする。

熟練した専門家にとって、問題を把握して解決の方法を考えることは(ア)を整えて(イ)を焦点化することであり、(ウ)によって直感的に解答を導きだしているのである。

設問七

右に傍線部のある語句(c)「住み慣れた家であれば、一日中でさえも無意識に過ごせる」のはなぜか。本文中の語句を用いて、三十五字以内で答えなさい。

設問八 右に傍線部のある語句(d)「無意識のうちにも、かなり高度な心の働きを実現している」とあるが、具体的にはどのようなことが行われているのか。その説明に当たる箇所を、本文中から十五字で書き抜きなさい。

設問九 本文の内容と合致するもの一つを選び、記号で答えなさい。

ア 歴史的な発明・発見は、あるとき突然アイデアが到来したかのように見えるが、実は見えない所で悩ましい努力を続けているのである。

イ 私たちは、意識的に何か行うことが人間らしい生き方だと思いこみがちだが、実際には、私たちの心は無意識によって支えられている。

ウ 無意識も、それなりにトレーニングを積みなければきちんと働かなくなるので、時には無意識の働きを再確認することも必要である。

エ 無意識に記憶するふだんの状態について、変化が見られれば危険な信号として意識を目覚めさせ、その必要がない刺激は無意識のうちに抑制する。

オ 無意識には生活の知恵を産み出す貴重な仕組みが備わっているが、ごく自然に日常を過ごしているような人には、暗黙知を働かせる機会がほとんどない。

問題二 次の文章を読んで、設問に答えよ。

石を投げたらそのまま突きぬけていきそうなくひくい雲が南の空にぐんぐん流れて、幾日も降り続いた雨は

A あがりそうだった。

ぼくときいちゃんは雨合羽の袖をたくしあげながら、水かさの B 増した運河に何度も釣り竿の先を叩

きつけた。赤土のまじった運河の水はオシルコのような色になっていたが、雨あがりには普段かからない大きな
① 獲物 が釣れるのだ。けれどその日は降り続いた雨が多すぎたのか、何時間やっても竿には何もかからなかった。

「だめだなあ、流れてくる草に浮子がからまっちゃうよ」

きいちゃんは中学生の兄さんから ② かりてきた雨合羽が大きすぎるので、まるでテルテルボウズのようにな
りながらぶかぶかと長靴をならして歩き回り、カン高い声でたびたび文句を言った。大粒の雨はまばらな霧小便の
ようになってはちばちとぼくたちの合羽を鳴らし、眼の前の運河はその ③ みなも に休みなくいくつもの水紋の
輪をつくっていた。

いくら頑張ってもまったく釣れそうもない、というのがようやくわかり、きいちゃんが「もうやめだやめだ」と言っ
て釣り道具をしまいはじめたとき、ぼくは運河の上流からふいに恐竜が現れてくるのを見た。それは、 C 靄
のかかったような川の上に、いきなり巨大な黒い鎌首をもたげた恰好であらわれてきたのだ。

わあ！

と、思わずぼくはけたたましい声をはりあげてしまった。ぼくの叫び声にきいちゃんも顔をあげ、同じように「わ

あ！」と言った。

わあ、しゅんせつ船だ！

と、きいちゃんのははじけるような声で言った。

「しゅんせつ船だ！」

運河の工事が景気よく進んでいた頃、この川には何台もしゅんせつ船がやってきた。そしてその D 恐竜の
首のような巨大な切削機をふり回しながら、おそろしいほどの重い唸り声をあげて運河の底に噛みつき、おびただ
しい量の ④ 土砂 を呑み込み、船尾に引きずっている長い尻尾をぶるぶるとふるわせた。船尾から出ている尾はド
ラム管をつなげたような巨大なパイプで、その中を水といっしょに川底の土砂がごろんごろんとうなりをあげて流
れていくのだ。

しかし、梅雨あけの近い、運河の上に薄ぼんやりとした輪郭をみせたしゅんせつ船は、靄の中でおとなしい恐竜
のようになんだか変に弱々しく考え深げにみえた。けれどじっと見ているとそのあたりからひくいエンジンの唸り
がきこえてきたので、おとなしい恐竜が雨あがりの川の上でようやく眼覚めてきた、というような ⑤ けはい にも
みえた。

梅雨があけるとまた運河の工事が再開されるらしい、という噂が学校の仲間たちのあいだにとびかいはじめたと
き、ぼくときいちゃんは、しゅんせつ船が川上から降りてきたのを最初に見たのは自分たちなんだ、という話をい
つも自慢にした。

しかし、本格的に梅雨があけ、まぶしい陽光の中を海からの風が気分よく吹き込むようになって、工事は E
再開しなかった。

ぼくときいちゃんは、一向に工事のはじまらない運河にやっぱり毎日のように出かけた。その頃は二人とも
すっかり釣りに ⑥ こ っていたので、工事ははじまらないのはつまらなかつたけれど、しかし工事がはじまる
と釣りができなくなってしまうので、「まあいいやどっちだって……」というような気分で相変らず学校が終ると

⑦ 一目散 に運河に向ったのだ。

(椎名誠『ポールド山に風が吹く』)

(註)★しゅんせつ船 水底の土砂を掘削して除去する船。

設問一

内①～⑦の平仮名(ひらがな)は漢字に、漢字は平仮名(ひらがな)に書き換えなさい。

設問二

A E には、どんなことが入るか。次の中から最も適切と思われるものをそれぞれ一つ

ずつ選び、記号で答えなさい。

ア まさしく イ うつすらと ウ ようやく エ ぐんと オ なかなか

設問三

右に二重傍線部のある1～4の語句の文法的説明として、次の中から最も適切と思われるものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 形容動詞 イ 名詞+助詞 ウ 動詞+助動詞 エ 副詞

設問四

右に傍線部のある語句(a)(b)について、以下の問いに答えなさい。

I 「思わずぼくはけたたましい声をはりあげてしまった」とあるが、その理由を三十字以内で答えなさい。

II 「きいちゃんのはじけるような声で言った」とあるが、このときの「きいちゃん」の気持ちを二十字以内で簡潔に説明しなさい。

設問五

右に傍線部のある語句(c)「霧の中でおとなしい恐竜のようになんだか変に弱々しく考え深げにみえた」とあるが、しゅんせつ船がこのようにみえた理由として最も適切と思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつもは何台もやってくるのに、今日は一台だけで存在感が希薄だったから。

イ 目の前に現れたしゅんせつ船は、自分の記憶と大きくかけ離れていたから。

ウ まだ稼働していないので、以前のような力強さがなかったから。

エ 霧のせいでしゅんせつ船の細部の構造がはつきりみえず、不思議な印象を受けたから。

オ 動いていないため、他の船を指揮しているような感じがしたから。

設問六

右に傍線部のある語句(d)「ぼくときいちゃんは、一向に工事のはじまらない運河にやっぱり毎日のように出かけた」とあるが、このときの二人の心理として**当てはまらない**と思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 噂の通り工事がはじまっているかどうかを確かめようとする気持ち。

イ 工事が進んで、一日も早くきれいな運河になることを期待する気持ち。

ウ 工事の再開するところをみて、また仲間たちに自慢しようという気持ち。

エ 巨大なしゅんせつ船が力強く動いているところをみたいと思う気持ち。

オ 工事がはじまる前に、できるだけ釣りを楽しんでおこうという気持ち。

設問七

この文章の特徴として最も適切と思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 比喩を多用して、情景を鮮明に描き出している。

イ 日常的な題材を取り上げることで、親近感を抱かせている。

ウ リズム感のある文体で一気に読ませる工夫をしている。

エ 独特の世界観を提示して、読者の興味をひいている。

オ 一文を短くすることで、臨場感を持たせている。